

# カミュ『ペスト』のメモ

takaidos

アルベール・カミュ(1913-1960)。  
1947年発行。

宮崎峰雄・訳。  
1969年発行。

デフォー『ペスト』を読む前に本書カミュ『ペスト』を読むのをオススメ。

読んでいると石川達三が思い出される。  
おかれた状況、日常、思想、思惑が実に良く語られている。

抽象的・哲学的な会話でよく分からない部分もあった。

死刑に嫌悪感を持つタルーは死刑制度を支えて来た大衆の中に自身も入っているとする。  
それはまるでペストにかかっているようなものである、と。  
そのためにこれまでずっとペストと戦って来た、犠牲者の側に立つとリウに打ち明ける。  
(→死刑を宣告された囚人が殺人者であった場合、殺された人や遺族の側のことは考えないのか?)

## <目次>

1. 4月、妻を療養所に送り出すリウ。オラン市にペスト発生。
2. 隔離された街。別離。パヌルー神父の説教。タルーとリウ。ランベールの脱走計画とタルーの保健隊結成。
3. 8月、外郭区から中央オフィス街に近づくペスト。隔離と火葬。
4. 9~12月、街を支配するペストとの戦い。隔離されるオトナー家とオトン判事の息子の死。パヌルー神父の死。
5. 1月、ペスト敗退。タルーの死。

## 訳者解説

### <登場人物>

ベルナール・リウー:医師。妻は病弱で数百キロ離れた市街の療養施設にいる。母親が来て身の回りの世話をしてくれる。★

ミッシェル老人:アパートの門番。

ジャン・タルー:他所から来て大きなホテルに住む、裕福な若者。がっしりと彫りの深い顔、一文字の濃い眉毛。保健隊を組織する。ノ

ートを残す。父親は次席判事。自身は死刑に嫌悪感。★  
オトン氏:予審判事。2人の男の子と娘と妻がいる。☆  
レイモン・ランベール:パリから来た新聞記者。内縁の妻はパリに。  
☆  
メルシエ:市の鼠害対策課の課長。  
パヌルー神父:博学かつ戦闘的なイエズス会士。☆  
ジョゼフ・グラン:フェテルブ街。補助吏員。50歳くらい。妻ジャーヌは別の男と駆け落ち。保健隊の幹事役になる。★→日本人サラリーマンみたいな存在か？

コタール:フェテルブ街。密輸・密売人。首吊り自殺しようとした。投機。金利生活者。☆  
リシャール:医者。  
カステル:老医師。ペストの復活を口にする。血清を作る。★  
カステル夫人:ペストの数日前に別の町に買い物に出ていた。  
喘息持ちの爺さん:★  
猫に唾を吐く爺さん:

県知事:  
総督:フランスのおく総督。

ガルシア:市を抜け出す手引き。コタールがランベールに紹介。  
ラウル:市を抜け出す手引き。ガルシアがランベールに紹介。  
ゴンザレス:市を抜け出す手引き。ラウルがランベールに紹介。衛兵と通じている。馬面。フットボール選手。  
マルセル:民間人で職業軍人といっしょに門の警備をしている衛兵。  
イスパニア系少年。  
ルイ:民間人で職業軍人といっしょに門の警備をしている衛兵。イスパニア系少年。

<あらすじ>

194x年4月、アルジェリアの要港オラン市に大量のネズミの死骸が発見される。  
ペストが発生する。

ペスト発生後まもなく。  
カフェに集まった人々は酒を飲みながら楽観的な言葉を喚き散らした。  
我々は相変わらず自分たちの個人的な感情をまず第一の関心事とした。

パヌルー神父の説教。  
「ペストは神から出た懲戒。」

しかし皆さんを苦しめているこの災禍そのものが、皆さんを高め、道を示してくれるのです。」

街を脱出したいと相談する新聞記者ランベールに対する人々の対応

。例外を許さない：

形式屋：やたらに親切な助言を振りまいたり、慰めたり。

方式屋：カードに記入させ分類。

慣例派：別の場所や、さらにとるべき新たな手続きを指示。

遺体の数は週に数百人が日に数百人へと増大。

タルー「この世の秩序は死の掟に支配されている。天上の世界に目を向けず、あらん限りの力で死と戦った方がいい。」

タルーはリウに「神を信じるか？このペストはあなたにとってどういうものか？」

リウ「際限なく続く敗北です。」

ペストが外郭区から街の中央に近づいて来る。

特に被害のひどい若干の区域は隔離されることになった。

ペストを焼き殺す幻想にとらわれて自分の家に火を点ける者も現れた。

彼らは平静でかつ放心したように、そして実にうんざりした目付きをしているので、彼らのせいで町じゅうが待合室の観を呈するほどだった。

ペストはすべての者から恋愛とさらに友情の能力さえも奪ってしまった。

我々にとってはもはや刻々の瞬間しか存在しなかった。

ランベールはタルーからリウの奥さんは数百キロ離れた療養所に入院していると聞き、脱走をやめて保健隊に入る。

オトンの息子が発症し、家族はみんなバラバラに隔離される。

カステルの作った血清を試すが、結局苦しむ時間を伸ばすだけに終わった。

パヌルー神父

「踏みとどまるべきだ。子供の死さえも神の御心に任せそして個人の力に頼ろうなどとしないうにすべきである。」

パヌルーもその後発症して死亡する。

ペストに罹っても持ち直す例が出て来て、ついに町中にもネズミや猫が戻って来る。

タルーはリウに「自分の父親はひとに死刑を宣告する判事だった、考えてみれば自分も死刑を支持する側のひとりだった、そうした側はペストに罹っているようなものだ、自分はだから以前からずっとペストと戦って来たようなものだ」と打ち明ける。

そして頑丈なタルーはペストに感染してしまう。  
タルーはリウの家でリウの母親とリウといっしょに暮らしていた。本来なら隔離だがリウの母親は家で看病しようといい、リウは血清を射つがタルーはついに死んでしまった。

ランベールの内縁の妻はパリから来てふたりはやっと会う事が出来た。  
しかしペストとの戦いはランベールの内面を大きく変えていた。

<メモ>

冒頭の文はダニエル・デフォー

「ある種の監禁状態を他のある種のそれによって表現することは、何であれ実際に存在するあるものを、存在しないあるものによって表現することと同じくらいに、りにかなったことである。」